

フィロデンドロンの育て方

Philodendron

サトイモ科 / Araceae

光を吸い込むようなビロードの葉、白く浮かぶ葉脈、登るほどに大きくなる成葉。中南米の熱帯雨林に育つサトイモ科の大属で、乾燥地植物とはまったく違う「湿度と木漏れ日」の世界を楽しめる観葉植物です。

基本データ

🌱 成長期

夏型（春～秋生育。熱帯性で休眠はしないが15℃以下で生育停滞）

🌡 耐寒温度

10℃以上が目安（ビロード葉の山地種は安全側で15℃以上。15℃以下で生育停滞）

☀ 日照

明るい日陰（レースカーテン越し。直射日光は葉焼け）

📅 播種適期

5～7月（25℃前後を保てれば室内で周年）

🕒 発芽日数

種差が大きい。早い種で1～3週間、遅い種で1～4か月以上（目安）

📍 主原産地

中南米・カリブ海域の熱帯雨林（メキシコ北部～ウルグアイ南部。多様性の中心はアマゾンと大西洋岸森林）

📏 難易度

📌 概要・魅力

フィロデンドロン属（Philodendron）は、サトイモ科（Araceae）でアンスリウムに次ぐ大きな属で、種数はおおよそ500種前後、見解によっては600種を超えるともされます。属名はギリシャ語の「philo（愛する）」と「dendron（樹）」に由来し、多くの種が熱帯雨林の林床で芽生え、気根で樹の幹をよじ登りながら成長する**半着生のつる性植物**です。分布はメキシコ北部からウルグアイ南部まで、中南米とカリブ海域の熱帯に限られ、アマゾンや大西洋岸の森林が多様性の中心です。

多肉植物やコーデックスとは環境がまるで違い、木漏れ日・高い湿度・年中安定した暖かさの中で育つ植物です。「水を切って締める」「よく日に当てる」という乾燥地植物の常識は当てはまりません。

フィロデンドロンが愛される理由

- **葉の造形の多様さ** — ハート形、矢じり形、羽状に深く裂けた葉まで、同じ属とは思えないほど姿が違います。
- **ビロード質の葉と葉脈** — ベルベットの質感に白～銀色の葉脈が浮かぶ種は、観葉植物の中でも別格の存在感です。
- **幼葉から成葉への変貌** — 多くの種で、登るにつれて葉が大きく形も変わります。実生苗の小さなハート形の葉が数年かけて種本来の姿になる過程そのものが楽しみです。
- **耐陰性があり室内向き** — 直射日光のない室内でも育ちます。

代表的な仲間

- **ベルコーサム**（P. verrucosum）— コスタリカからペルーにかけての標高の高めな湿潤林に自生する登攀種。ビロード質の葉と、毛のような鱗片に覆われた葉柄が魅力。暑さと乾燥にはやや弱いとされます。
- **グロリオサム**（P. gloriosum）— コロンビア固有。樹に登らず、林床を這う茎から白い葉脈のビロード葉を出します。
- **メラノクリサム**（P. melanochrysum）— コロンビア固有。黒緑色のビロード葉に淡い葉脈。登らせて数年かけると葉が大型化します。
- **セローム**（P. bipinnatifidum、流通名 P. selloum）— 羽状深裂の大葉を広げて幹立ちする直立性の大型種。属内では例外的に寒さに強く、種子でも殖やされる実生向きの代表種です。

SEEDSTOCKでは、ベルコーサムやセロームのほか、P. radiatum、P. tripartitum、P. grandipes、P. pterotum、P. tenue など、挿し木苗ではなかなか手に入らない種の種子も扱っています。実生なら幼葉から成葉へ変わる姿を最初から見届けられ、同じ種でも個体ごとの葉脈や色味の違いから好みの株を選ぶ楽しみがあります。

セロームの学名について

セロームやザナドゥなど幹立ちする直立性のグループは、2018年に **Thaumatococcus**（タウマトフィルム）属として分離す

る提案が発表されました。ただし主要な植物データベースはまだ採用しておらず、流通名も P. selloum のままが多いため名前の食い違いが残っています。本ガイドではフィロデンドロンの仲間として扱います。

取り扱いの注意：全草にシュウ酸カルシウムの針状結晶を含み、犬や猫が噛むと口の中の強い刺激や嘔吐を起こします。ペットや小さなお子さまの手の届かない場所に置いてください。樹液や果実の果肉で皮膚がかぶれることがあるので、**剪定・植替え・種子の取り出しの際は手袋を着用しましょう。**

🌞 置き場所

自生地は高い木々の下に差し込む木漏れ日の世界です。置き場所の基本は**直射日光の当たらない明るい場所**。乾燥地の植物のように「できるだけ日に当てる」必要はなく、強い直射はむしろ葉焼け（黄変や褐色の斑）の原因になります。

光

- 室内ならレースカーテン越しの窓辺が標準です。東向きや北向きの明るい窓辺も向いています。
- 耐陰性はありますが、暗すぎると葉が小さくなり茎が間延びします。暗い場所と直射の両極端を避け、「明るい日陰」を目指します。
- セロームなど直立性の大型種はやや明るい光を好み、ピロード葉の種は特に直射を嫌います。春～秋に屋外へ出すなら、遮光ネットの下や軒下を選びます。

温度

熱帯性のため、多肉植物のような明確な休眠期はありません。暖かければ年中ゆっくり生育し、気温が下がると鈍するというリズムです。おおむね20～30℃で元気に育ち、**15℃を下回ると生育が停滞**し始めます。

- 越冬の下限は一般的な流通種で**10℃**が目安ですが、コロンビアやエクアドルの山地の雲霧林に由来するピロード葉の種（グロリオサム、メラノクリサム、ベルコーサムなど）は寒さにも暑さにも繊細なので、**安全側として15℃**を切らないのが無難です。
- 秋、最低気温が15℃前後まで下がったら（関東以西でおおむね10月ごろ）室内へ。冬の窓際は夜間に冷え込むので窓から少し離し、暖房や冷房の風が直接当たる場所は避けます。
- セロームは例外的に寒さに強い種ですが、幼苗のうちは他の種と同じく保温します。

湿度と風通し

室内では**湿度50～70%**を目安にすると葉が美しく育ちます。葉先が黄色く縁取られて茶色く枯れ込むのは湿度不足のサインです。加湿器や、水を張った受け皿に小石を敷いて鉢を乗せる方法（鉢底は水面より上に）で湿度を上げられます。ただし湿度

と同じくらい大切なのが**風通し**。空気のとどんだ高湿度は病気の温床になるので、サーキュレーターなどで空気をやさしく動かしましょう。

支柱・モスボールで登らせる

つる性の種は、気根がつかまれる**モスボール**、**ヘゴ材**、**コルク板**などの支柱を立てて登せると、株が安定し、葉が格段に大きくなります。自生地では登って明るい樹冠近くに達したときに大型の成葉を出す性質があるためで、メラノクリサムのような種は垂直に登らせて数年かけてはじめて本来の大きさの葉を見せます。一方、グロリオサムのような匍匐性の種は支柱ではなく、浅く横長の鉢が向いています。

🌊 水やり

水やりは、「完全に乾かしてからたっぷり」という多肉植物の管理とは発想が少し違います。基本は**用土を均一に湿らせ、かつ過湿にしないこと**。乾かし切らず、びしょ濡れにもしない、その中間を保つのがコツです。過湿による根腐れと乾燥によるしおれ、どちらのリスクもあります。

春～秋（生育期）

- 鉢土の表面から**2～3cmが乾いたら**、鉢底から流れ出るまでたっぷり与えます。
- 受け皿の水は必ず捨てます。鉢底が常に水に浸かった状態は根腐れの最大の原因です。
- 水は株元の用土に与え、**葉や葉柄をなるべく濡らさない**ようにします。葉が長時間濡れたままだと細菌性の病気が出やすくなります。

冬（生育停滞期）

- 生育が鈍る冬は水を吸う量も減ります。用土が乾いてからさらに**2～4日ほど待つ**てから与え、控えめにします。
- ただし休眠しているわけではないので断水はしません。カラカラに乾かし続けると根が傷み、春の立ち上がりが遅れます。室温に近い水を使いましょう。

葉水について

葉水（霧吹き）は湿度を補いハダニ予防にもなる一方、葉を濡らしたままにすると病気のリスクが上がるという考え方もあり、意見の分かれるところです。行う場合は**朝のうちに**、夜までに葉が乾くようにしましょう。湿度そのものは加湿器や小石トレイで上げるほうが確実です。

肥料

生育期の5～10月（真夏は控えめに）に、緩効性の置き肥を2か月に1回程度、または薄めた液体肥料を1～2週間に1回程度与え、冬は与えません。多すぎると葉先が下に巻いて縁が茶色く枯れ込みます。塩類の蓄積に敏感なので、「少し足りないかな」くらいが安全です。

しおれているのに土が湿っているときは、水不足ではなく**根腐れ**を疑ってください。さらに水を与

えると悪化します。鉢から抜いて根を確認しましょう。

🔧 用土・植替え

自生地の根は樹皮や腐植の隙間に伸び、空気によく触れています。鉢栽培でも水はけと通気性を確保しつつ適度に保水する、いわゆる「アロイド（サトイモ科）向け」の用土が基本です。多肉植物用の鉢物質中心の用土では乾きすぎ、一般の培養土の単用では水もちがよすぎて根腐れしやすくなります。

用土の配合例

- ・ **アロイドミックス（基本）**：観葉植物用培養土2：オーキッドバーク（洋ラン用バークチップ）1：パーライト1。手軽で失敗の少ない出発点です。
- ・ **通気性重視**：バーク3：ココチップ2：パーライト2：くん炭1。乾きが早いぶん水やりの頻度は上がりますが、根腐れしにくい配合です。くん炭は排水と防カビに役立ちます。
- ・ **国内で手に入りやすい資材で**：赤玉土（小粒）7：腐葉土3を基本に、パーライトやバークチップを加えて軽く仕上げます。水苔だけの栽培も可能です（毎年交換）。

鉢選び

- ・ 鉢底穴のある鉢が必須です。つる性の種は支柱を立てる前提で倒れにくい重さとサイズを、グロリオサムなど匍匐性の種には根茎が横に伸びられる浅く横長の鉢を選びます。
- ・ 大きすぎる鉢は乾きにくく根腐れのもとです。根が少し詰まり気味のほうが管理しやすいので、植替えは一〜二回り大きい鉢までにとどめます。

植替え

- ・ **時期**：生育が盛んな**5〜8月**。生育が鈍る冬の植替えは避けます。
- ・ **頻度**：1〜2年に1回。用土は塩類の蓄積を防ぐため2年ごとを目安に更新します。
- ・ **サイン**：鉢底から根が出る、水やり後すぐ乾く、葉色が薄くなる、成長が止まる。
- ・ **方法**：根鉢を軽くほぐし、傷んだ根を取り除いて一回り大きい鉢へ。つる性の種は支柱も大きくして誘引し直し、数週間は半日陰で養生させます。

気根の扱い

茎から出る気根は切らずに活かします。支柱やモスボールに沿わせて活着させるか、鉢土の中へ導いてやると、株が安定し、水や養分の吸収も増えて葉が大きく育つ方向に働きます。

作業時は必ず手袋を。切り口から出る樹液はシュウ酸カルシウムを含み、体質によってはかぶれます。

🌱 発芽のさせ方

フィロデンドロンは園芸的には挿し木や組織培養で殖やされることが多く、実生（種子からの育成）はまだ情報の少ない世界です。だからこそ種子から育てた株には特別な価値があります。最大のポイントは種子の鮮度と光の2つです。

種子の特徴

- ・ **極小で寿命が短い**：長さ1mm前後と、サトイモ科の中でも最小級。果実から取り出して乾燥させると急速に発芽力を失うので、入手したらできるだけ早く播くことが鉄則です。
- ・ **光で発芽する**：学術的な実験で、暗黒下ではまったく発芽せず光の下でのみ発芽することが確認されています。覆土はしないか、光を遮らない程度にごく薄くします。
- ・ **発芽日数の種差が極端**：数日で芽が出る種から数か月かかる種まであります。

播種の適期と温度

自然温で管理しやすいのは**5〜7月**。室内でヒーターマットを使えば周年播けます。発芽温度の目安は**25℃前後（24〜30℃）**で、20℃を下回ると発芽が遅れ腐敗のリスクが上がります。

1. **果肉を完全に取り除く** — 果実付きで入手した場合は、手袋をして果実を潰し、ぬめりのある果肉と膜を指先でこそげ取り、目の細かい茶こしで流水洗いします。果肉は刺激性があるうえ、残るとカビの原因になります。洗った種子は乾かさずすぐに播き、すぐ播けないときは湿らせたキッチンペーパーに包んでポリ袋に入れ、涼しい場所ですら短期間だけ保管します。浸水は必須ではありませんが、水か発根促進剤の希釈液に数時間浸すと吸水がそります。
2. **播種床を用意する** — 粉碎した水苔とパーライトを1:1で混ぜたもの、またはピートやココピートを含む種まき用培土を清潔な容器に入れ、熱湯や電子レンジで殺菌します。底面から吸わせて全体を湿らせ、表面を平らにします。
3. **表面に播き、覆土はしない** — 極小の種子を重ならないように湿った用土の表面に置きます。覆土はしないか、節った水苔やピートをごく薄く（種子が透けて見える程度に）かけるにとどめます。乾燥が心配なら、光を通すトレットペーパーを1枚だけ種子の上に乘せる方法が国内でも実践されています。
4. **密閉して高湿度を保つ** — 透明な蓋付き容器やジップ付きの袋で覆い、直射日光の当たらない明るい場所に置きます。光は必要ですが、直射は容器内の温度を急上昇させて種子を傷めます。
5. **温度を25℃前後に保つ** — ヒーターマットなどで**24〜30℃**を維持します。上げすぎは腐敗を招くので30℃を大きく超えないようにし、1〜2日に1回は蓋を開けて換気します。
6. **表面を乾かさず、水は清潔に** — 用土の表面が常に湿っているよう霧吹きで補います。腰水にする場合もトレーの水は都度入れ替えます。極小の種子は塩類に弱いので、肥料分は与えません。

7. **発芽を待つ（目安は種によって大きく異なる）** — 新鮮な種子なら、セロームのように早い種では**1〜3週間**で発芽が始まります。SEEDSTOCKに寄せられた発芽報告でも、セロームを25〜30℃・覆土なしで管理し、播種から17日目までに14粒中13粒が発芽した例があります。一方で種によっては**1〜4か月以上**かかり、発芽がばらつくことも珍しくありません。早々にあきらめず、**最低でも3〜5か月**は湿度と温度を保って待ってください。
8. **発芽後は徐々に外気に慣らす** — 蓋を少しずつずらして**通気**と光を増やします。一気に開けると急な乾燥で幼苗が傷むので段階的に。カビた種子や倒れた苗は見つけ次第取り除きます。
9. **本葉が2枚ほど出たら鉢上げ** — 根を崩さないように1株ずつ小鉢に移します。用土は成株と同じアロイド向けの配合を細かめにしたもので構いません。鉢上げ後も湿度を高めに保ち、明るい日陰で育てます。
10. **1年目は保温して育て続ける** — 実生苗の初期成長はゆっくりで、幼苗は低温に弱い植物です。1年目の冬は成株より暖かく（できれば18℃以上）保ち、生育を止めないようにします。

実生苗の最初の葉は、多くの種で小さなハート形です。そこから切れ込みや穴、矢じり形といった種本来の姿に少しずつ変わっていきます。この変化を何年もかけて見届けられるのが、挿し木苗にはない実生の醍醐味です。

🌱 病害虫・トラブル

フィロデンドロンのトラブルは、**高湿度**を好む性質と表裏一体の**細菌性の病気**と、**過湿**による**根腐れ**が二大要因です。「葉を濡らしたままにしない」「鉢底に水を溜めない」「空気を動かす」という日頃の管理で大半が防げます。

細菌性の軟腐・葉枯れ（最重要）

葉に小さな水浸状の斑点ができ、急速に広がって黄褐色〜黒色になり、葉柄に達すると葉が溶けるように崩れて落ちます。**悪臭を伴う湿った腐敗**が特徴で、高温多湿の時期や剪定の傷口から広がりやすく、手や水はねで他の株に伝染します。発症した葉はすぐ切り取ってハサミを消毒し、重症株は隔離します。予防は**頭上からの水やりを避け**、**葉と葉柄を乾いた状態に保つこと**、**風通しの確保**、13℃以上の維持です。

根腐れ

下の葉から黄色く変色して落ち、上へ進んで株全体が衰弱します。水はけの悪い**用土**と頻繁な水やりの組み合わせが主因です。鉢から抜いて黒く柔らかくなった根を取り除き、新しい**通気性**のよい用土に植え直します。進行すると回復は難しいので、受け皿に水を溜めない、鉢を大きくしすぎないという予防が大切です。

害虫

- **ハダニ** — 高温乾燥で急増し、葉裏から吸汁して葉がカスリ状に色抜けします。メラノクリサムなどのビロード葉種は特に弱い傾向があります。湿度を保ち、葉裏を観察し、早期に**殺ダニ剤**や葉の洗浄で対処します。
- **カイガラムシ・コナカイガラムシ** — 年間を通じて発生し、排泄物からすす病を招きます。綿棒やブラシで取り除き、必要に応じて薬剤を使います。
- **アザミウマ（スリップス）** — 葉の組織を削って吸汁し、銀色のかすり傷のような跡を残します。見つけ次第薬剤で対処します。

生理障害（病気ではないトラブル）

- **葉焼け** — 葉の中央や先端に焼けたような白〜茶色の斑。**直射日光**が原因なので光を落とします。
- **低温障害** — 下葉が黄化します。症状が数日遅れて出ることがあります。
- **葉が小さい・茎が間延びする** — 光不足。もう少し明るい場所へ移します。
- **葉先が下に巻いて縁が褐変** — 肥料の与えすぎ。施肥を止め、たっぷりの水で塩類を洗い流します。
- **モザイク状の黄色い斑** — ウイルス病の可能性。治療法がなく器具や害虫を介して伝染するため、隔離して道具を消毒します。

実生苗のトラブル

播種から幼苗期は**カビ**と立枯れが最大の敵です。用土の殺菌、清潔な水、定期的な換気で予防し、**カビた種子**や倒れた苗は早めに取り除きます。

全草にシュウ酸カルシウムを含みます。犬・猫・小さなお子さまが口にしないよう置き場所に注意し、ペットが噛んでしまったら口の中の植物片を取り除いて、速やかに動物病院を受診してください。

✍ 栽培メモ



フィロデンドロンの種子を探す

QRを読み取る／seedstock.jp